研究開発４　海外グローバル研修

１　目的と期待される成果

（１）目的

海外で研修を実施し，課題研究の成果を発表し，ディスカッションすることにより，異文化を理解するとともに，グローバル社会における生き方・在り方について考え，課題研究を深める。

（２）期待される成果

日本の歴史・伝統・文化を世界に発信し，国際社会を牽引するリーダーとしての資質や能力が身に付くことが期待できる。

２　内容

①　ＳＧＨイギリス海外研修
②　ＳＧＨドイツ海外研修
③　ＳＧＨシンガポール海外研修
④　オランダ派遣
⑤　オーストラリア短期研修

３　実施方法

各研修については，普通科の生徒から選抜する。

①　ＳＧＨイギリス海外研修（１０名）２年次に実施
②　ＳＧＨドイツ海外研修（１０名）２年次に実施
③　ＳＧＨシンガポール海外研修（２０名）２年次に実施
④　オランダ派遣（５名）１年次に実施
⑤　オーストラリア短期研修（２０名程度）２年次に実施

実施後，活動報告書及び活動の記録等を基に学校設定科目「ＧＬアクティブ」の評価とする。

４　検証評価方法

検証方法は，生徒及び教員に対して，取組ごとに記名式４択式アンケートを実施し，その結果と健康状態の調査等の結果により評価する。また，保護者の評価も取り入れる。

５　実施内容

（１）オーストラリア

【ア　概要】

日時	平成３０年７月２０日（金）～８月３日（金）１４泊１５日
訪問先	ブリスベン，ナンボー・クリスチャンカレッジ等（オーストラリア連邦）
参加者	２学年生徒２０名　男子６名，女子１４名

	引率教員　教諭　坂本　光雄（英語），教諭　内山　浩史（地歴・公民）
目　的	１　現地の高校生を対象とした課題研究の発表や現地高校生・大学生とディスカッションを通じて，異なる観点からのフィードバックを受けるとともに，異なる視点を得ることにより，課題研究を深化させる。 ２　現地の家庭や交流校での参与観察を通して，日本との比較を行い，グローバルな課題について探究を深める。 ３　英語によるコミュニケーション能力を高める。 ４　異文化理解を深めるとともに，自国の文化を再認識する。

【イ　日程】

月日	スケジュール等	宿泊
平成３０年 ７月２０日(金)	・成田発	機内
７月２１日(土)	・ゴールドコースト着 ・フィールドワーク（クイーンズランド博物館・ローンバインコアラ園・マウントクーサ） ナンボー・クリスチャンカレッジへ移動	ホームステイ
７月２２日(日) ～７月２５日（水）	（ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修）	ホームステイ
７月２６日（木）	・日本文化プレゼンテーション，ナンボー・クリスチャンカレッジ生徒とグループトーク	ホームステイ
７月２７日（金）・ ～７月３０日（月）	（ナンボー・クリスチャンカレッジ語学研修）	ホームステイ
７月３１日（火）	・課題研究発表，ナンボー・クリスチャンカレッジ生徒とディスカッション	ホームステイ
８月１日（水）	・ナンボー・クリスチャンカレッジ交流会	ホームステイ
８月２日（木）	・クイーンズランド大学訪問，講義，大学生とのディスカッション	ホテル
８月３日(金)	・ゴールドコースト発 ・成田着	

【ウ　事前指導】

回	日時	学習内容
1	４月１２日（木）	自己紹介・リーダー決め・連絡網作成・課題研究について
2	４月２０日（金）	グループ決め
3	４月２６日（木）	日本文化発表準備
4	４月２７日（金）	保護者説明会
5	５月　１日（火）	日本文化発表準備
6	５月１１日（金）	前年度派遣生徒との交流会
7	５月２５日（金）	日本語原稿提出（考査最終日）

８	６月　１日（金）	日本文化発表リハーサル（日本語）
９	６月　８日（金）	ＳＧＨ課題研究発表リハーサル（日本語）
１０	６月１４日（木）	日本文化発表・SGH 課題研究発表英語原稿提出
１１	７月　９日（月）	ＳＧＨ課題研究発表リハーサル（英語）
１２	７月１１日（水）	日本文化発表リハーサル（英語）
１３	７月１３日（金）	ＳＧＨ課題研究発表リハーサル（英語）
１４	７月１７日（火）	日本文化発表リハーサル（英語）
１５	７月１８日(水)	ＳＧＨ課題研究発表リハーサル（英語）・最終確認等

【エ　現地での活動】

（ア）日本文化発表

ナンボーカレッジの８年生（中学２年生相当）の生徒全員約４０名４グループを対象にＳＧＨ課題研究をＡ３用紙（写真やグラフなど）とテーマに必要な現物（あんこのグループはホームステイ先で焼いたあんこの入った２種類のパイ）を使って発表した。テーマごとに４グループに分かれて，発表した。その後，各自が準備した質問を聞いたり，アンケートを記入してもらったりした。１回のセッションは質疑応答を含めて約８分間だった。それを４回繰り返した。

発表テーマ

① 「佐倉・成田周辺にインバウンドを呼び込むには～武家屋敷，ヒヨドリ坂などの紹介を通じて～」

② 「日本のペット事情～日本のペット文化紹介～」

③ 「コメを使った日本の食文化紹介」

④ 「世界あんこ化計画～日本の食文化あんこのよさを紹介～」

（イ）ＳＧＨ課題研究発表

ナンボーカレッジの１０年生（高校１年生相当）の生徒全員約１００名を対象にＳＧＨ課題研究を発表した。テーマごとに４グループに分かれて，発表した。その後，各自が準備した質問を聞いたり，アンケートを記入してもらったりした。発表は，質疑応答を含めて各グループ約１２分間だった。

①「通勤ラッシュを解決しよう～サマータイム導入の検討を通じて～」

②「広めよう外国人にわかりやすいゴミ捨てマナー～外国人人にもわかりやすいゴミ出し表示を考える～」

③「MOTTAINAI～落花生の殻を活用しよう～」

④「戦争を語り継ぐ～日豪の伝え方から考える～」

（ウ）日本文化発表・課題研究発表の考察

生徒は限られた準備期間だったにも関わらず，全生徒が英語で課題研究を発表することが出来た。昨年度より，ＳＧＨ課題研究の全体的な進みが早く準備時間があったが，もう少し英語力をつける必要がある。

トピックとしては，日豪双方の高校生に関心が高く社会課題として共通に認識しているもの(広めよう外国人にわかりやすいゴミ捨てマナー，佐倉・成田周辺にインバウンドを呼び込むには等)の方が，聞き手が興味を持って聞き，反応が得られやすい。

課題研究について，意見交換やアンケートを，それぞれが発表時または発表後に実施させていただいた。アンケートを実施した生徒は「日本とオーストラリアでのアンケートの結果を比べ，ＳＧＨ研究課題につなげることができた。」と述べており，課題研究をまとめる参考になったようだ。

（エ）クイーンズランド大学訪問

① キャンパスツアー

約１時間のキャンパスツアーでは，様々な学部の校舎，博物館等を見学した。広大な敷地に，素晴らしい施設があり，将来このような環境で留学したいと思った生徒もいた。

② 大学生とのグループトーク

生徒１０人に対し，大学生１～２人が入って，グループトークを１時間実施した。最初はスモールトークから入り，雰囲気が和むと用意した課題研究の質問をしながらディスカッションに入った。

日本人の学生もいたので，日本とオーストラリアに関する知識量に差があったこと，学生のファシリテーターとしての力量，生徒の英語力・準備，トピック内容により，ディスカッションの充実度にかなり差があった。例えば，ゴミ問題をトピックとするグループは，課題研究担当教員の指導下あらかじめ質問事項を準備するなどディスカッションの焦点が比較的絞れており，また英語でのコミュニケーション能力が高い生徒がディスカッションに積極的に参加し，質の高いディスカッションを持つことができた。生徒の中には「考えたこともないような質問を受け，異なる視点を得ることが出来た」との声が聞かれた。反対に質問が絞りにくいトピックについてはディスカッションの内容が深まらなかったと言える。海外研修と課題研究のテーマの連動性を高める工夫を検討する必要がある。

③ 講義

“Multiculturalism and Diversity in Australia”というトピックで講義が行われた。内容はオーストラリアの多様性，その強みと問題，多文化主義の必要性であった。

講義後の質疑応答も行われた。講義の内容を理解した上で，自分なりの視点を持ち，例えば「なぜイギリスからの罪人が来ていたのに治安が悪化しなかったのか」など英語で質問出来る生徒もいた。

事前にオーストラリアの歴史や文化の多様性について学ぶために Harmony Day の英文記事などを読んだ生徒は理解を深めていた。しかし，White Policy＝「白豪主義」などについて十分理解することができなかった生徒もいた。事前指導において，地歴公民科等と連携した事前学習を一層充実させる必要がある。

【オ　事後指導動】

（ア）レポート

帰国後，生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。

ナンボ―カレッジでの１０年生の生徒を対象に行った，日本文化発表，「佐倉・成田周辺の文化施設紹介」では，「街並みが日本独特で美しい」「博物館が面白い」などの現地の生の声が収集出来て，貴重な体験だった。「ここからさらに発展させて日本文化である地域の文化を発信したい」という意欲が高まり，オーストラリアで直に異文化をもつ高校生に意見を聞くことが出来たので，今後の研究の参考になった。また，課題研究発表の「広めよう外国人にわかりやすいゴミ捨てマナー」発表では，プレゼンの中で佐倉市や成田市のゴミ

袋を使いオーストラリアの高校生に分別してもらった。「１日にどれくらいのゴミの量を千葉県では出るのか」「日本人はなぜそんなに細かく分別するのですか」などの質問が出た。

以下は「分別ルールをより分かりやすく伝える」について研究している生徒のレポートの一部である。

〈レポート〉

私達は日本のゴミ問題について研究，発表しました。現在日本では各市町村によってルールはことなりますが，沢山の項目に分別しなければなりません。しかし海外ではあまり日本のように分別する文化がないため，海外からの移住者は日本の分別ルールをとても難しく，また面倒に感じると思います。そこで私たちはどのようにすれば外国人にも分かりやすく分別ルールを伝えられるかを考えた上で，カレンダーを制作しました。

このプレゼンテーションをするにあたって私はオーストラリアのゴミ問題についていくつか気づいたことがあります。

一つめは，クイーンズランドでは二種類にしか分別しないことです。赤と黄色の大きなゴミ箱を各家庭一つずつ持っており，リサイクルできるペットボトルや瓶などは黄色いゴミ箱に，それ以外は赤いゴミ箱に入れて指定の日になったら道路際に出しておくという形でした。燃えるゴミと燃えないゴミには分別していませんでしたが，私がホームステイした家庭では，生ごみは家で飼っていたチキンのエサにしていました。燃えるゴミと燃えないゴミを分別しないところにはオーストラリアには土地があるから埋められるのかなと思いましたが，生ごみが家で消費される仕組みは日本もチキンを飼えとまでは言いませんが何らかの形で真似できたらなと思いました。このようにあまり何種類にもゴミを分別しないオーストラリアの人達にとって，日本の分別はとても難しいもののようでした。プレゼンテーション内での分別クイズでは戸惑っている様子が見られ，佐倉市のポスターを用いても５人中２人が間違えてしまうという結果になりました。また，なぜ日本は何種類も分別するのかという質問も受けられたため，これからはポスターの改善や，分別文化を外国の方々に知ってもらえるようにすることが課題の一つではないかと感じました。

（イ）報告会

① 日　時　平成３０年１０月９日（火）６限　ＧＬ探究（総合的な学習の時間）

② 対　象　１・２学年生徒

③ 場　所　本校体育館

④ 内　容　課題研究の発表やアンケート，クイーンズランド大学訪問について報告した。

（ウ）アンケート

帰国後，参加生徒にアンケートを実施した。

１　この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
１８人	２人	０人	０人
２　この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
１８人	２人	０人	０人
３　日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。			
かなりできる	まあまあできる	あまりできない	全くできない
０人	２０人	０人	０人
４　あるトピックについて英語でプレゼンテーションすることができる。			
かなりできる	まあまあできる	あまりできない	全くできない
３人	１６人	１人	０人
５　あるトピックについて英語でディスカッションすることができる。			
かなりできる	できる	少しできる	全くできない
１人	７人	１２人	０人
６　今回の海外研修で，課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。			
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
１１人	５人	４人	０人
この海外研修で学んだこと，得たこと，感じたこと等 ・英語力の大切さはもちろん，積極的に行動することの大切さも学ぶことができました。 ・自分の視野を広げることができ，今後，新たな視点で物事を見られたらいいと思います。 ・プレゼンでは今後に生かせそうな貴重な意見をもらえて，課題研究のいい調査になりました。 ・オーストラリアと日本の異なる文化を感じることができた。また学校でプレゼンをしたり，地元の生徒やホストファミリーと話すことで自信がついた。 ・日本にいたときには気づかなかった日本の良さや工夫など改めて知ることができた。 ・食の違い，生活様式の違い，考え方の違い，驚くべきことが多くありました。			

【カ　成果と課題】

課題研究の発表に対するコメントやディスカッションから，課題研究に関する新たな情報や視点を得ることできた，と感じた生徒が多かった。特に，アンケートを準備して実施した生徒は課題研究をまとめる参考資料となり，大きな収穫を得ることが出来た。ただし，トピック「戦争を語り継ぐ～日豪の伝え方から考える～」については，日本で８月に報道されているような太平洋戦争についての報道はなく，現地生徒，教員の関心は低く，十分なフィードバックを得られなかったようだ。海外研修と課題研究のテーマの連動性をより高める工夫も必要だろう。

一方，ＳＧＨで身に付けさせたい力である「日本の歴史・伝統・文化に対する理解の深化」「日本と諸外国を比較し異文化を理解しよりよき未来を指向する力」「コミュニケーション能力」は大きく向上した。特に日本文化のプレゼンテーションは，現地で複数回発表が出来たので，さ

らに良くなった。同じ内容のプレゼンを複数回行ったことにより，伝えたい内容をはっきりと主張でき，聞き手の質問にもはっきりと答えられるようになった。Ｑ＆Ａに対処出来るかどうかはトピックによって差があったが，日豪双方の生徒や大学生が身近に感じる問題はＱ＆Ａが盛んにおこなわれた。

大学訪問では英語でのコミュニケーション能力と知識の差がはっきりと現れた。準備したことは話せるが，その場での即興的なやりとりはまだ限界がある。より社会的・学術的なトピックについて，即興的にやりとり出来る英語でのコミュニケーション能力の育成が課題である。

ナンボークリスチャンカレッジでの課題研究発表（写真）

クイーンズランド大学での講義（写真）

（２）シンガポール

【ア　概要】

日　時	平成３０年９月１２日（水）～９月１５日（土）３泊４日（機内泊１日を含む）
訪問先	クレア（自治体国際化協会）・シンガポール事務所，St.Joseph’s Institution（セントジョセフ中高校），シンガポール国立博物館，ナイトサファリ
参加者	２学年生徒１１名　女子１１名 引率教員　教諭　井守　雄一（英語），　教諭　滝口　圭太（英語）
目　的	１　現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げ，さらに英語によるコミュニケーション能力を高める。 ２　異文化への理解を深めるとともに，自国の文化を再認識する。 ３　現地の高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに，ディスカッションを行い，考えを深めたり異なる視点を得たりすることにより，課題研究を深化させる。

【イ　日程】

月日	スケジュール等	宿泊
平成３０年 ９月１２日(水)	・羽田発シンガポール着 ・フィールドワーク（イスラム寺院，仏教寺院見学等）	ホテル
９月１３日(木)	・フィールドワーク（シンガポール国立博物館：博物館等で日本との歴史伝統文化比較） ・クレア（自治体国際化協会）シンガポール事務所訪問（現地校でのプレゼンテーションに向けた準備，事務所職員よる英語でのプレゼンテーション等への助言等）	ホテル
９月１４日(金)	・St.Joseph’s Institution でのプレゼンテーション，ディスカッション，授業体験 ・フィールドワーク（リトル・インディア，ナイトサファリ） ・シンガポール発	機内
９月１５日(土)	・成田着	

【ウ　事前指導】

（ア）日程

回	日時	学習内容
１	５月　７日（月）	リーダー決め・連絡網作成・課題研究について
２	５月１５日（火）	研究内容と派遣を見据えた今後の取り組みについて
３	６月　７日（木）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）①
４	６月１１日（月）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）②
５	６月１４日（木）	シンガポールの歴史・文化・風土についての特別講座 講師：関教諭（地歴・公民科）
６	６月１８日（月）	プレゼンテーションの枠組み作成（日本語）③
７	７月１１日（水）	プレゼンテーション（日本語）と発表内容の修正
８	７月２０日（金）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）①
９	７月３０日（月）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）②
１０	８月　１日（水）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）③
１１	８月２３日（木）	プレゼンテーションとアンケート作成（英語）④
１２	８月２７日（月）	リハーサルと発表内容の修正①
１３	８月３１日（金）	リハーサルと発表内容の修正②
１４	９月　３日（月）	リハーサルと発表内容の修正③
１５	９月　４日（火）	特別講義・リハーサル　Wei Chiang Yap 氏（シンガポール出身・東京大学修士課程）
１６	９月１０日（月）	結団式　校長挨拶・引率挨拶・最終確認

（イ）特別講義

①　日　時　平成３０年９月４日（火）

②　目　的　海外研修（シンガポール派遣）に向けて，課題研究のプレゼンテーションを行い，フィードバックを受けるとともにシンガポール事情についての知識を得る。

③　講　師　東京大学修士課程　Wei Chiang Yap 氏
④　テーマ　シンガポール社会に関するブリーフィング
⑤　内　容　派遣時に現地で円滑な発表，質疑応答への対応などコミュニケーションが図れるように，プレゼンテーションを練習した。さらに，シンガポールの人々と交流する上で留意すべき文化的な違いや歴史的な背景に基づく慣習の違いについて，お話しいただいた。特別講義を受けて，生徒達は課題研究発表や現地でのコミュニケーションに対して意欲が高まった。

【エ　現地での活動】

（ア）St.Joseph's Institution（SJI）での発表・討議内容（本校生徒１１名，SJI 生３０名）

課題研究テーマ	発表形式
PEANUTS REVOLUTION	口頭発表
AKIYA HOTEL	口頭発表
Regional Vitalization of Sakura and Yokoshibahikari	ポスター発表
Let’s eat fish for health!!	ポスター発表
Creating An Interest in Politics!　~By the Students,　For the People~	ポスター発表

＊SJI 生からは「シンガポールの多民族共生社会について」の口頭発表があった。

※　SJI 生からの質疑応答（日本語訳）

○ Peanuts Revolution
Q　どんな人をターゲットにするつもりですか。
A　部活動など運動を頑張っている高校生などを想定しています。

○ Akiya Hotel
Q　佐倉では，どのような体験ができますか。時期や内容を教えてください。
A　春は桜やチューリップが楽しめます。天候に関係なく，年間を通じて忍者体験や鎧体験，茶道体験などをすることができます。

○ Eating Fish for Our Health
Q　「なめろう」の作り方を教えてください。
A　手で魚をさばきます。内臓などを取り出し，食べやすいようにほぐしていきます。

○ Regional Vitalization of Sakura and Yokoshibahikari
Q　佐倉や横芝光への行き方を教えてください。
A　佐倉は成田空港から電車で２０分ほどです。横芝光へは直通バスがあり，４０分ほどで着きます。

○ Creating Interest in Politics
Q　日本では投票は義務とされていますか。
A　日本では投票は義務ではありません。放棄しても罰則などはありません。

【オ　事後指導】

（ア）報告会

①　日　時　平成３０年１０月９日（火）６限　ＧＬ探究（総合的な学習の時間）
②　対　象　１・２学年生徒
③　場　所　本校体育館
④　内　容　セントジョセフ中高校でのＳＧＨ課題研究の発表や質疑応答の内容，アンケート結果等について報告した。

（イ）アンケート

①　この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。

かなりできた	まあまできた	あまりできなかった	全くできなかった
９人	２人	０人	０人

②　この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
１０人	１人	０人	０人

③　日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができた。

かなりできた	まあまできた	あまりできなかった	全くできなかった
１人	８人	２人	０人

④　自分の課題研究をシンガポールの高校生を対象に英語でプレゼンテーションすることができた。

かなりできた	まあまできた	あまりできなかった	全くできなかった
９人	２人	０人	０人

⑤　課題研究の内容についてシンガポールの高校生と英語で話し合うことができた。

かなりできた	まあまできた	あまりできなかった	全くできなかった
２人	９人	０人	０人

⑥　今回の海外研修で，課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
４人	６人	１人	０人

⑦　この研修は，課題研究テーマを考えるのに役立った。

おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
７人	８人	２人	０人

⑧　自由記述

・「自分たちが当たり前と思っているような前提を変えてみる」という発想を元に研究を進めることを提案されて，新たな視点だなと思った。
・クレア事務所やＳＪＩでの情報交換を通して，外国人の視点から見た日本は私たちのそれとは違い，目のつけどころが全然違うことがわかった。
・フードコートやスーパーマーケットに行った時，日本の魚料理（特に寿司）は普段から食べられていることがわかった。
・クレアの事務所でプレゼンテーションをした時に，海外の人への情報の伝え方（グラフ等）を丁寧にしないと理解されないことがわかった。
・事前にその国で使われているものとそうでないものを調べておくべきだった。日本特有のものについては補足説明が必要だった。
・シンガポールにはあまり空き家が無く，空き家についての情報は得られなかったが，クレアやＳＪＩで質問やアドバイスをもらえたので，今後に生かせそうである。
・小さな国だが，宗教・民族など様々な人々が共生していると，身を持って感じた。
・日本でインターネットで調べたことだけではわからないことが本当に多くあったので，現地で調査したり，話を聞いたりすることは大切だと感じた。
・現地の学校での交流では自分の言いたいことが上手く伝わらずに悔しかったので，これからもっと英語の勉強をがんばろうと思った。
・日本と海外の文化（食生活・学校・宗教など）の違いが多くあることを学んだので，異文化をより理解し共生していくことが大切だと感じた。

【カ　成果と課題】

海外研修への意欲と行動力に溢れた生徒が集まり，また，昨年度の反省点である「早期取り組み」の実施，「英語運用能力」改善も相まって充実した研修となった。

アンケート結果や生徒の感想から，参加生徒はシンガポールの多文化共生社会を実感するとともに，シンガポールの文化と日本の文化を様々な観点から比較検討し，よりよい社会を志向する力がついてきていると判断する。

課題研究については，事前指導を通して発表内容の充実や英語での受け答えについて十分に準備をしたことで，現地では聞き手を惹きつけ，十分に理解させた上で問題提起をすることができた。また，質疑応答の中で自分たちとは違った視点の感想や意見を得ることができたので，今後の研究の充実につながっていくと思われる。

（3）オランダ

【ア　概要】

日　時	平成３０年１１月１５日（木）～１１月２５日（日）１０泊１１日
訪問先	ライデン，アムステルダム，ウィンシュホーテン（オランダ王国）
参加者	１学年生徒５名　男子１名，女子４名　　引率教員　教諭　鈴木　菜生（英語科）
目　的	１　本校ＳＧＨ研究テーマである「日本の歴史・伝統・文化」が海外でどのように紹介され，現地の人々にどのようにとらえられているか現地調査する。 ２　インタビュー・アンケート等，フィールドワークの手法を学び，実践する。 ３　ＳＧＨ課題研究テーマに関する異なる観点を得ることにより，課題研究の内容を深化させる。 ４　藩校時代より本校との関係の深いオランダ王国で行われる国際青少年会議（主催ドラードカレッジ校）に出席し，ヨーロッパ各国の高校生との協働を通じ，国際的な視野を広げる。 ５　コミュニケーション能力（英語を含む）を育成する。

【イ 日程】

月日	スケジュール等	宿泊
平成３０年 １１月１５日（木）	・成田発 ・アムステルダム着，ライデンへ移動	ホテル （ライデン）
１１月１６日（金）	・ライデン現地調査（シーボルト博物館・国立民族博物館にて学芸員による説明・インタビュー） ・ライデン大学訪問（ライデン大学学生とのディスカッション） ・アムステルダムへ移動	ホテル （アムステルダム）
１１月１７日（土）	・アムステルダム現地調査（アンネフランクの家） ・ウィンシュホーテンへ移動	ホームステイ （ウィンシュホーテン）
１１月１８日（日） ～２２日（木）	・ドラードカレッジにて国際青年会議参加 議題：What will the ideal school of the future look like?	ホームステイ （ウィンシュホーテン）
１１月２３日（金）	・国際青年会議終了後アムステルダムへ移動	ホテル （アムステルダム）
１１月２４日（土）	・アムステルダム発	機内
１１月２５日（日）	・成田着	

【ウ 事前指導】

（ア）日程

回	日時	内容
1	７月２７日（金）	派遣生徒・保護者説明会
2	９月　５日（水）	リーダー決め・連絡網・オランダ派遣について

３	９月　７日（金）	オランダについて（地歴・公民科）
４	９月１２日（水）	日本文化・佐倉高校プレゼンテーション準備
５	９月１４日（金）	日本文化・佐倉高校プレゼンテーション準備
６	９月１９日（水）	日本文化・佐倉高校プレゼンテーション準備
７	９月２１日（金）	前年度派遣生徒との交流会
８	９月２６日（水）	プレゼンテーションリハーサル・ディスカッション準備
９	９月２８日（金）	ディスカッション準備・ＳＧＨ課題研究・手法について
１０	１０月１９日（金）	ＳＧＨ課題研究・手法について，ディスカッション準備
１１	１０月２１日（日）	平成 30 年度佐倉オランダ児童交流事業ウェルカムパーティー参加
１２	１０月２４日（水）	日本文化・佐倉高校プレゼンテーションリハーサル
１３	１０月２６日（金）	ディスカッション準備
１４	１０月３１日（水）	ＳＧＨ課題研究アンケート作成
１５	１１月　２日（金）	ディスカッション準備
１６	１１月　７日（水）	プレゼンテーションリハーサル
１７	１１月　９日（金）	ディスカッション準備
１８	１１月１４日（水）	結団式（教頭挨拶・引率挨拶 等）

（イ）特別授業

① 目　的　オランダの歴史・政治・経済・地理等に関する知識を得ることにより，オランダに関する理解を深める。

② 日　時　平成３０年９月７日（金）

③ 講　師　関　研一　教諭（本校地歴・公民科）

④ 特別授業テーマ　「オランダの地誌」

⑤ 内　容

オランダに関する基本的事項，地理，産業，経済，社会，文化について説明した。オランダは日本ではよく知られていないが，河川交通がヨーロッパで物流拠点として大切な役割を果たしていること，干拓によって国が作られたこと，農業が盛んなこと，自動車削減の取り組み，世界の模範とみなされてきた社会保障制度，寛容の精神についてなどについて講義を行った。

【エ 現地での活動】

（ア）フィールドワーク（ライデン・アムステルダム）

① ライデン市内

現地ガイドに，日本の小京都的な雰囲気をもつ歴史と文化の町，ライデンについて，名所を訪ねながら案内してもらった。生徒は，天皇陛下がライデンを訪れていたことや，建物の壁に日本の俳句が書かれていることなど，市内の随所に日本との繋がりを発見することができた。

② シーボルトハウス・国立民族学博物館

シーボルトハウスでは，日蘭関係担当のフォラー邦子氏の案内で館内を見学した。１８２３年にオランダ政庁の医官として日本のオランダ商館に派遣されたフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが集めた美術品や日用品，植物学や動物学の資料，地図などを鑑

賞した。世界の様々な民族の過去の暮らしを知ることができる国立民族学博物館では，日本・韓国コレクション学芸員のダン・コック氏の案内で，日本のコレクション倉庫及び館内展示を鑑賞した。「日本人が目につけないようなものが数多く展示されていて興味深かった。日本人絵師の作品がオランダで発見されたことに対し日本とオランダの深い交流関係を実感し，日本から遠く離れた地で日本のことが良いニュースとして取り上げられたことをうれしく思いました。」と述べる生徒もおり，本校ＳＧＨの研究テーマである「日本の歴史・伝統・文化」が海外で紹介されている様子を調査することができた。

③　ライデン大学学生との交流

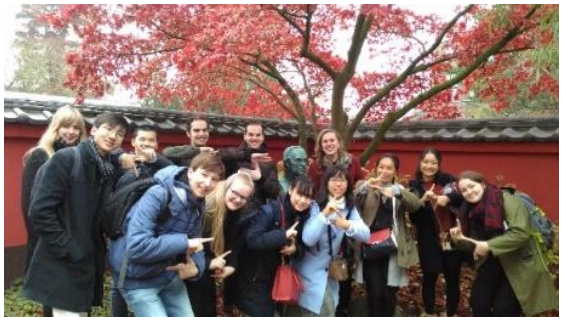
ライデン大学にて，同大学日本語学科及び韓国語学科学生が参加する学生団体，『狸の会』の方々８名と交流。「よさこいサークル」の活動や，シーボルトが持ち帰ったとされる日本の植物も生育する植物園を見学し，昼食を共にした。交流中，ＳＧＨ課題研究に関するアンケート調査を行い，帰国後の課題研究活動へ向け参考となる情報を収集することができた。昼食後は，大学図書館内にて，日本に関する書籍の陳列棚なども見学した。

④　アンネ・フランクの家

アンネ・フランク一家が１９４４年にアウシュビッツの強制収容所に送られるまでの２年間を過ごしたと言われている隠れ家を訪れた。生徒にとって，歴史継承の重要性や，迫害や戦争などのグローバル課題について考える好機となった。アンネの日記を読んでいた生徒は，「実際に目にしたときと本で読んだときの衝撃の差は大きいものでした。窮屈な生活を強いられながらも強く前向きに生きていたアンネのことは忘れられるべきではないと強く思い，戦争や歴史が語り継がれていく大切さを学ぶことができました。」と感想を述べた。また，他の生徒は「『なぜ同じ人間であるのに，宗教が違うだけ差別がおきてしまうのか』と胸が痛みました。日本にいると，迫害という問題にはなかなか目がいきませんでしたが，アンネの家を実際に訪ねて見たことにより，迫害や戦争を確実に減らしてゆかなくてはならないという気持ちをはっきりと持つことが出来ました。」と述べた。

ライデン市内

シーボルトハウス



ライデン大学学生との交流会

アンネ・フランクの家

（イ）国際青年会議（ウィンシュホーテン）

ドラードカレッジで行われた国際青年会議に参加した。参加国はオランダ，フィンランド，ポーランド，イタリア，ドイツ，日本の６か国であり，今回の議題は “What Will the Society Look Like in the Coming Decades?”（数十年後の未来の社会とは）であった。１班１３～１４名で構成される班に分かれ，各国生徒たちと，議題に関する話し合い，最終日に，各班が考える『数十年後の未来の社会』について，模型やポスター，パンフレット，演劇などで全体発表した。滞在中，課題研究に関するアンケート調査を実施した。テーマは①スマートアグリ，②食品ロス，③動物の殺処分の３つである。①に関しては「スマートアグリによって水などの資源が削減できること，街にスマートアグリ用のビニールハウスが増えていること」など，フィールドワークならではの情報が収集できた。②については聞き取り調査により「食品ロスへの関心は高くロスを減らすために工夫をしている人もいるが，あまり結果に結びついていないのではないか」「10 代は他の世代と比べ，関心が低い」ということが分かり，日本との共通点を発見できた。③については「オランダでは本当に殺処分が行われていないこと，殺処分することに否定的な考えをもっていること」が分かり，生徒は日本の現状を変えるため，更なる研究の必要性を感じていた。

また，「英語が十分に聞き取れない，言いたいことが思ったように話せない，様々な壁に何度もぶつかりました。」「日本人と大きく違うなと感じた場面は意見の衝突が起こった時です。日本人は私を含め，自分と違う意見が出たとき強く相手の意見を批判することはあまりないと思います。しかしそこでは，両者自分の意見を強く主張し，引く様子はありませんでした。日本人の相手の意見を尊重する姿勢はすばらしいですが，時には自分の意見を通すことも大切なのではないかとも思えるようになりました」等の感想があった。

【オ　現地での活動】

（ア）レポート

帰国後，生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。

（イ）報告会

① 日　時　平成３０年１２月２１日（金）

② 対　象　１学年生徒

③ 内　容　課題研究に関する現地フィールドワークの成果と課題や，オランダで日本の文化・伝統がどのように紹介されているか，研修を経て国際的な視野・コニュニケーション能力について考えたことについて報告した。

（ウ）アンケート

帰国後，参加生徒にアンケートを実施した。

1　この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
3	2	0	0	5
2　この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
5	0	0	0	5
3　日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。				
かなりできた	まぁまぁできた	あまりできなかった	全くできなかった	計
1	4	0	0	5
4　課題研究の内容についてオランダの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。				
かなりできた	まぁまぁできた	あまりできなかった	全くできなかった	計
1	2	2	0	5
5　今回の海外研修で，課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
2	3	0	0	5
6　５で①あるいは②と答えた人は具体的に（いつ，どこで，どのようなことを）書いてください。				
●ホストファーザーが課題研究に関連した仕事をしていて，それについてよく話を聞くことができた。(②) ●アンケートをとり，自分の予想と異なる視点を発見できた。(②) ●ライデンで街の中をガイドさんの話を聞きながら，歩いていた時，歴史のある街を実際に見ながら肌で感じることによって，本やネットではわからないような雰囲気を知ることができ，フィールドワークの大切さを学んだ。歴史や文化を知ることによって，その土地のことをよく知れるので，よりオランダの歴史や文化を学びたいと思った。(①)				

●日本で作成した課題研究（食品ロス）についてのアンケートに，ドラードカレッジの学生やホストファミリーに答えてもらった。また，家族団らんの時に，ホストファミリーが行っている食品ロス対策などについて話し合った。(②)
●私は「動物の殺処分を減らすために」というテーマで SGH の課題研究を行っているが，今回オランダでそのテーマについてのアンケートをとることができた。その結果からオランダでは殺処分が行われていないことや，オランダ人の殺処分についての考え，オランダでの対策などと知ることができた。今後の研究に生かしたい。（①）
●現地の学生や他国の学生に対するアンケート。(②)

７． この海外研修で学んだこと，得たこと，感じたこと等，自由に書いてください。

●課題研究の「スマートアグリ」について，農業と機械化のどちらが良いかという質問に対し，自分の予想に反して，様々な意見があった。そのようなことから，必ずしもスマートアグリが外国人に良いイメージで浸透している訳ではないのだなと強く感じた。
●ライデン大学の学生さんの中で，ゴミからエネルギーをつくり，野菜を育てるということを研究している方からお話をうかがえました。ゴミを減らすだけでなく，再利用するという新たな視点を得ることができました。
●ライデン大学の学生にアンケートに答えてもらったところ，１人の男子学生は食品ロスやリサイクルに興味があり，主に食材の有機廃棄物をエネルギーに変える活動を行っている，ということでした。
●アンケートで「日本では動物の殺処分が行われているが，これに対してどう思うか」という設問を設けたところ，「信じられない」や「他にもっと方法があるはず」「なぜそんなことをするのかがわからない」などの答えが返ってきた。オランダの人々は「殺処分をする」という発想があまりなく，日本はやはり他国と比べて意識が低いのではないかと思った。その意識を高めていく為の制作を今回の結果を生かして改めて考えていきたいと思った。

８． ７で答えた和蘭の高校生や大学生からの質問やコメントに対して，どのように考えましたか。具体的に答えてください。

●７で記述したことに加えて，良いイメージではないにしろ，日本余地「スマートアグリ」の知名度は高く，実際に普及しているのだなと思った。
●再利用するには，専門的な知識が必要なので，高校生には難しいと思いました。
●日本と同じ食品ロスが多いオランダの大学生が，その問題を改善するための活動を行っていると知り，もっと知りたいと思いました。有機ゴミを活用するリサイクル方法はぼんやりとは知っていましたが，その仕組みなどは詳しく知らなかったので，教えていただけてよかったです。学生ができるほど身近で手軽なら，日本でももって普及できるようにすると良いと思いました。
●改めて考えてみると，殺処分問題はかなり深刻なことなのではないかと思う。現に，オランダやドイツでは動物を保護することに関する細かい法律などが定められており，またイギリスなどでも，殺処分に関することだけでなく，犬を６時間以上家に放置してはいけないなどの法律が実際に制定されている。だからこそ，外国人は日本の殺処分問題をとても残念なことと捉えているようである。対して日本人は殺処分が行われていることを知っている人は多いが，そこまで深刻に捉えている人は少ないのではないだろうか。政府や市などが積極的にこの問題を解決することに努めることを期待したい。

10. この海外研究で学んだこと，得たこと，感じたこと等，自由に書いてください。

●まず，自分の英語力がまだまだだなということを感じる研修だった。また，日本との違いが多く，いわゆるカルチャーショックを強く受けた。しかし，新たなことも発見できたし，とてもいい海外経験になったと思う。
●この海外研修で一番の壁となったのは言葉です。英語が上手く聞きとれない。自分の言いたいことが上手く表現できない。何度も相手を困らせてしまいました。後からよう考えれば，もっとましな英語で表現できたようなことでも，いざその場で話そうとすると言葉が出てこない。自分の英語力のなさを情けなく思い，何度も「なんであの時こう言わなかったのだろう」と後悔しました。しかし，全てにおいて後悔したわけではなりません。たくさんの人々の優しさや温かさにゆれ，甘えてばかりではいけないと改めて強く思い，英語力を上げようと決意しました。

●私がこのオランダ派遣に参加した大きな理由として，自分の英語スキルの向上が挙げられます。もちろんリスニング能力やスピーキング能力は，普段の授業と比べたら少しは上がったのではないかと思います。しかし，今回の派遣を通して，英語はあくまでも勉強のためも“ツール”であることを改めて感じました。また，オランダやその他のヨーロッパの学生との交流を通じて，西欧との文化や感性の違い，共通点を多く発見することができました。違いについては，お互いがお互いを知ろうとしなければいけないと感じました。
●このオランダ研修を通して，私は大きく分けて２つのことを学んだ。１つは，英語の大切さである。英語はいくら紙に書いたり，読んだりすることができても会話ができなければ本当のコミュニケーションは成立していないと私は思う。そして，その点で私はまだまだ聞いたり話したりする能力が不足していると感じた。英語が話せなければ何も伝えることはできない。改めて勉強する必要があると思った。２つめは日本のすばらしさである。オランダで驚いたことはシャワーがあまりいきおいよくでないことや，食事がとても少ないことだが，このような点で日本は水や食材が豊かですばらしい国なのだと気づくことができた。
●オランダと日本の地理の違いを強く感じました。また，日本についてとても興味を持ってくださっているオランダの方々も多いのだと学ぶことができました。（生徒Ｅ）

【カ　成果と課題】

本研修を通して，生徒は次のとおり自己の考えを表出している。

「英語の大切さと自分の英語力の低さを改めて実感しました。今回の研修では現地の人々やホストファミリーの英語が聞き取れず，苦労することが何度もありました。しかし，英語は「勉強」ではなく，自分の意見を伝えるための一つのコミュニケーションとしての「ツール」です。英語ができなければどんなに素晴らしいアイデアを持っていても相手に伝えることができません。私は英語を「勉強」ではなく「コミュニケーション」として捉えることが大切だと思いました。近年では，翻訳機などのツールで簡単に自分の意見が伝えられるような世の中になってきています。しかし，実際に相手の顔を見て，自分の思いを自分自身で表現することがコミュニケーションにおいて最も大切なことなのではないでしょうか。そして，それを実行するためには英語は必ず必要です。私は今，この研修を通して学んだ英語の大切さを一人でも多くの日本人に伝えたい。オランダで過ごした１０日間は日本にいる時と比べてはるかに密度の濃い時間でした。皆が経験していないことができたことを誇りに思うし，自分が他の人よりも一歩前に進めたことに自信を持っています。この体験を活かして，ＳＧＨの課題研究や英語の学習などに取り組んでいきたい。そしてまた海外で色々なことを学びたい」，「違いを見つけて一線を置くのではなく，共通点を見つけて平等にくらしていくこと。それが，日々暮らしていく中でとても大切なことだと研修を終えた今思います。だから私は，これから人との共通点を大切にし，平等に接していくことを頭に置いていきたいと思います。また，その人種の壁を乗り越えるためにも英語をもっと勉強して，グローバルな人間を目指して頑張りたい」

生徒は，学習する意味，英語の必要性，コミュニケーションの在り方を再認識するとともに，グローバル人材として必要な要素を見出している。以上のことから本研修の目的は概ね達成できた。特に，目的の２つ目「インタビュー・アンケート等，フィールドワークの手法を学び，実践する」及び３つ目「ＳＧＨ課題研究テーマに関する異なる観点を得ることにより，課題研究の内容を深化させる」については，昨年度からの課題であったが，事前にアンケート用紙を作成できたことで，現地でライデン大学やドラードカレッジ学生，ホストファミリー等から貴重なデータ収集をすることができた。４つ目「藩校時代より本校との関係の深いオランダ王国で行われる国際青少年会議（主催ドラードカレッジ校）に出席し，ヨーロッパ各国の高校生との協働を通じ，国際的な視野を広げる」についても，昨年同様，英語学習を振り返り，その動機付けを高めたり，積極性の大切さを学んだりすることができた。それに加え，今年度は，非

言語コミュニケーションの大切さ，人類共通と考えられる人間性などの要素について考えを深めることができた。１つ目「本校ＳＧＨの研究テーマである『日本の歴史・伝統・文化』が海外でどのように紹介され，現地の人々にどのようにとらえられているか現地調査する」という点に関しては，昨年同様，シーボルトハウス・国立民族学博物館での学習を通して，日本の歴史・伝統・文化について理解を深めることができた。

（4）ドイツ

【ア　概要】

日　時	平成３１年３月１３日（水）～３月１９日（火）６泊７日間（機内泊１日を含む）
訪問先	デュッセルドルフ（ドイツ連邦共和国）
参加者	２学年生徒１１名　男子６名，女子５名 引率教員　教諭　戸村玲子（英語科），秋保紗英（国語科）
目　的	１　現地の学生・社会人を対象に課題研究の成果を発表し，フィードバックを受け，ディスカッションを通じて異なる視点を得たりすることにより，課題研究テーマについて考え，まとめる一助とする。 ２　課題研究のテーマに関わる調査等を通して，生徒自身の研究に必要な情報を収集し，研究を深化させる。 ３　活動全体を通じて教養を高めるとともに，現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げ，さらにコミュニケーション能力を高める。

【イ　日程】

月日	スケジュール等	宿泊
平成３１年 ３月１３日（水）	・成田発 ・デュッセルドルフ着	ホテル
３月１４日（木）	・デュッセルドルフ日本総領事館，デュッセルドルフ市庁舎訪	ホテル
３月１５日（金）	・デュッセルドルフ大学訪問	ホテル
３月１６日（土）	・現地調査（デュッセルドルフ市内，エッセンツォルフェアイン炭鉱遺産郡等）	ホテル
３月１７日（日）	・現地調査（ケルン大聖堂，ボン歴史博物館等）	ホテル
３月１８日（月）	・ツェツィリアンギムナジウム（現地高校）訪問 ・デュッセルドルフ発	機内
３月１９日（火）	・成田着	

【ウ　事前指導】

（ア）日程

回	日時	学習内容
１	１１月１０日（金）	自己紹介・リーダー決め・連絡網作成
２	１２月　７日（金）	ドイツ事情　（本校　関教諭）

３	１２月１３日（金）	保護者説明会
４	１２月２１日（水）	ＳＧＨ課題研究発表準備
５	１月１０日（木）	ＳＧＨ課題研究発表準備
６	１月１１日（金）	ドイツ事情　(本校同窓生　寒郡茂樹氏)
７	１月１８日（金）	ＳＧＨ課題研究発表準備
８	１月２４日（木）	ＳＧＨ課題研究発表準備
９	１月２５日（金）	ＳＧＨ課題研究発表準備　ディスカッションプラクティス
１０	１月３１日（木）	ＳＧＨ課題研究発表リハーサル
１１	２月　１日（金）	ＳＧＨ課題研究発表準備　ディスカッションプラクティス
１２	２月　７日（木）	ＳＧＨ課題研究発表準備　リハーサル
１３	２月２１日（木）	ＳＧＨ課題研究発表準備
１４	２月２２日（金）	ＳＧＨ課題研究英語発表リハーサル
１５	３月１２日（火）	結団式　校長挨拶・引率挨拶・最終確認等

＊この他，英語で様々なことを説明する準備として，昼食時の会話練習（ALT と共に週１回)，ジャーナルライティングを行っている。

（イ）特別授業

① 日　時　平成３１年１月１０日（木）

② 目　的　ドイツの歴史・政治・経済・地理などに関する知識を得ることにより，ドイツに関する知識を深める。

③ 講　師　関　研一教諭（本校地歴・公民）

④ テーマ　ドイツの地誌

⑤ 内　容　ドイツに関する基本的事項，地理，歴史，産業，社会・文化について説明した。東西ドイツの分断と統一の歴史，エネルギー政策，自動車，電機・電子，精密機械などの工業製品輸出の高さ，移民・難民受け入れの状況など，生徒がドイツを訪問する上で必要かつ課題研究に関係した内容であった。

（ウ）特別講義

① 日　時　平成３１年１月１１日（金）

② 目　的　ドイツ及びデュッセルドルフなどに関する情報を得ることにより，ドイツに関する知識を深める。

③ 講　師　寒郡　茂樹氏（本校同窓会副会長）

④ テーマ　佐倉高校生デュッセルドルフ市訪問に向けて

⑤ 内　容　ビジネスでドイツ各地，特にデュッセルドルフ市に度々訪問し造詣の深い寒郡氏より，ドイツ人気質や文化，街の様子，商業における見本市の役割，千葉県とデュッセルドルフ市のつながりなどについてお話しいただいた。また，生徒の課題研究に関連した質問にも丁寧に答えていただいた。グローバル人材として，語学力ももちろんであるが，様々なことにチャレンジし経験を積んで実務能力を備えていくこと，異文化への理解と共に，自国の文化を深く理解し発信できることが大事だという激励の言葉をいただいた。

【エ　平成２９年度実施報告（平成３０年３月１４日～２０日）】

（ア）JETRO 訪問

①　ブリーフィング

担当者よりドイツでの労働慣習，日系企業について，また現在の JETRO の役割等について説明をいただいた。

②　課題研究発表

「難民問題について興味関心を高めてもらうための活動」「佐原の大祭，佐原への海外観光客を増やすツアーの提案」「伝統工芸品を広めるための試み」「訪日客を助ける手ぬぐいの提案」について各１０分の日本語での発表の後，質問・助言を頂いた。担当者の方がこれらの研究課題に対する造詣が深く，具体的な助言を頂くことができた。

（イ）デュッセルドルフ市庁舎訪問

①　ブリーフィング

International Affairs Department，Japan Desk at the Business development Office 担当者よりデュッセルドルフ市と日本，日本企業とのつながり，文化交流や行事及び難民受け入れなどについて説明を受け，質疑応答を行った。

②　副市長による歓迎と市庁舎内案内

③　市手配のガイドによる９０分の旧市街ツアー

（ウ）ツェツィリアンギムナジウム訪問

①　歓迎挨拶

②　課題研究発表と交流

２名の社会科担当教諭の生徒４２名（１０年生，１１年生）とその他見学者（時間によって他のクラスの生徒が講堂２階席より見学）に対して５つの研究発表を１０分ずつ行い，各発表の後に質疑応答を行った。合間には相手校生徒による歓迎のためのパフォーマンスも行われた。

「難民問題について興味関心を高めてもらうための活動」「佐原の大祭，佐原への海外観光客を増やすツアーの提案」「伝統工芸品を広めるための試み」「共働き家庭のためのキッズ」「キャンパス（学童向け放課後子供室）の提案」「海外読者向け漫画ペディア」についてそれぞれ研究発表を行った。現地生徒になじみのある働く女性の労働環境や子育て支援については多くの質問が寄せられたが，祭，伝統工芸などについては，課題そのものよりも，対象となっている祭りや工芸品に対する質問が多かった。発表者側から質問を投げかけて答えてもらう時間もあればよかったが，時間・場所の制約でできなかった。英語での質疑応答であったが，質問自体のポイントを把握しにくくわからな

い，質問に対して答える際に話したい内容に自分の英語が追いつかない場面が散見し，日本語・ドイツ語・英語のできる現地生徒に仲立ちしてもらう必要があり，語学力不足を反省する声が聞かれた。

③　昼食会

現地校の生徒が持ち寄った様々な料理を食べながら自由に話すスタイルで交流した。

④　文化紹介発表及び交流

日本語授業受講者１０名に向けて３つの発表を行った。（・訪日客を助ける手ぬぐいの提案　・日本文化の中の水　・日本のマナーなど）また，イースターについての現地校生からの説明やイースターエッグペインティング，折り紙などの活動を行った。

（エ）デュッセルドルフ大学訪問

①　課題研究発表

２名×５グループの本校生に対し大学生１名が入り１０分ずつの発表と質疑応答を３ローテション行った。大学生が１つ１つの発表に対して，内容への質問だけでなく，発表の仕方や発表資料の作り方についても丁寧助言をしてくれたので，生徒にとっては大変有意義な時間となった。

②　交流

２グループに分かれての日本語及び英語での歓談。

（オ）現地調査

ツォルフェアイン炭鉱遺産（ルール工業地帯），ボン現代歴史博物館，ベンラート城，アウグストゥスブルク城，ケルン大聖堂，デュッセルドルフ市内（旧市街，メディアハーベン）など。　それぞれの見学地から，ドイツの歴史の様々な時代の生活の様子や政治情勢，建造

物などについて学ぶことができ大変有意義であった。

（カ）事後指導

a　レポート

帰国後生徒は研修の成果をレポートにまとめて提出した。以下は抜粋である。

テーマ：働く女性のための子育て支援　Childcare for Working Women

私は働く女性の子育て支援として，小学校高学年の児童の学童保育に焦点を当て，国の「放課後子供事業」を参考にした放課後教室“Kids Campus”を提案した。

これは，学童保育の対象が低学年児童優先であるために学童保育をやめることを余儀なくされた高学年児童の居場所作りを目的としたもの。小学校の空き教室を活用し，スタッフ・地域住民・学生の三者が連携して基本的に無料でさまざまな体験活動を行えるような施設とした。

ドイツ研修では高校と大学で研究発表を行った。発表の後，いくつかの質問をいただいたが，その中にあらかじめ想定していた日本の子育て制度（学童保育や保育所など）だけでなく，「日本では女性が働いて男性が家事をすることについてどう考えられているのか。」，というような質問もあった。

また，大学では，ドイツの子育て支援制度についても詳しく教えていただくことができ，自分の研究において新たな視点を得ることができた。

＜ツェツィリアンギムナジウムでの質疑応答＞

現地校Ｑ：日本では父親が“主夫”をして母親が働くことはあるのか，またそれに関して周囲はどのように捉えることが多いのか。

生　徒Ａ：以前よりは増えていると思うが，まだ少なく理解も進んでいないと思う。

Ｑ：女性が占める管理職の割合を定めた法律はあるのか。

Ａ：主に大企業に目標があったりはするが，未だ十分ではないし，中小企業では更に厳しい。

上記の質問に対して，自分は意識せず「働く女性のための子育て支援」としてテーマを設定していたが，高校生からの上記の質問を受けて，その視点も必要だと思った。また，高校生・大学生の両方から日本とドイツの子育て制度や現状は大きく違うという意見をいただいたが，その違いがどのように，またなぜその様な違いがあるのかをもう少し深く掘り下げてみたい。

b　報告会

①　日　時　平成３０年５月８日（火）６限　ＧＬ探究（総合的な学習の時間）

②　対　象　１・２学年生徒

③　場　所　本校体育館

④　内　容　現地校で行った課題研究の発表や訪問先での活動報告

c　アンケート

帰国後，参加生徒にアンケートを実施した。

１　この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
9	1	0	0	１０

2　この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に関する興味・関心が高まった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
9	1	0	0	１０
3　日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。				
かなりできる	まぁまぁできる	あまりできない	全くできない	計
0	9	1	0	１０
4　あるトピックについて英語でプレゼンテーションすることができる。				
かなりできる	まぁまぁできる	あまりできない	全くできない	計
2	7	0	0	9
5　あるトピックについて英語でディスカッションすることができる。				
かなりできる	できる	少しできる	全くできない	計
1	8	1	0	１０
6　今回の海外研修で，課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
4	3	3	0	１０

この海外研修で学んだこと，得たこと，感じたこと等，自由に書いてください。

・特に大学生からのアドバイスを聞いてスライドや原稿を直した方が良い点が沢山見つかった。例)「佐原の大祭」のように聞き慣れない言葉は常にスライドに小さくでも表示すべき。⇒覚えてもらうためにも効果的。
・祭りのビデオを見せている間に必要な解説を入れるべき。⇒見たことの無いものが沢山流れているので理解してもらうためには必要
・手ぬぐいデザインに対してドイツでは観光スポットの名前が分からない，名前の表示してある駅と駅の間の駅の名も知らない。⇒日本のことをどれくらい知っているかにも差があるので，知らない情報は，分かり易く，簡単に，私達が当たり前と思っている情報も盛り込む必要がある。
・組子細工に対する質問が多く，プレゼンに対する質問・意見はあまりもらえなかったが，興味を持ってもらえたのだと思った。大学生と市庁舎ではマイスター制度について教えてもらった。
・自分は意識せず「働く女性のための子育て支援」をテーマにしたが，主夫についての質問をもらい，そのような視点も必要だったと思った。
・高校生・大学生共に，ドイツと日本の子育て支援制度等の現状は大きく違うという意見をもらったが，どのような違いか，なぜそのように違うのかもう少し深く掘り下げてみたいと思った。
・日本人の観点では気がつかないことも教えてもらえ，グローバル社会の中で自分の意見を主張するための方法の参考になった。
・英語のリスニング力が特に足りない。ガイドさんの説明はあまり分からなかった。学生との交流も何度も聞き返した。逆に日本語を学んでいる人には聞き取り易く話そうと思った。
・発表だけでなく学生と自由に話す時間がもっと欲しかった。
・英語表記がほとんどなくドイツ語表記ばかりで大変だった。
・・英語しか使えない環境に身をおくことで英語のスピーキング能力はかなり向上すると思う。
・海外の人との交流はとても楽しかった。
・色々な面で日本の当たり前は海外の当たり前でないこと，ドイツ人と日本人の考え方の違いなど，

海外に出ることで初めて実感できることがあり，書ききれないほど学ぶことができた。
・初めての海外で学んだことが沢山あった。日本との文化の違いを肌で感じられたことは大きい。
・自分の人生の中でも大きな意味を持つものになったと思う。
・英語の重要さを痛感した。
・異文化に触れることで日本のことがより見えるようになった。
・ＳＧＨ課題について，ドイツの方と話をすることで新たな問題点や改善案が見えてきた。
・出発前は不安だったが，参加してよかったと心から思っている。

（キ）成果と課題

課題研究のプレゼンテーションのみならず，ドイツに関しての文化や歴史等の基礎知識を５か月にわたって研修を重ね，地域理解をした上で現地を訪問したため，生徒にとってこのドイツ派遣は大変有意義なものであったといえるだろう。課題研究の発表においては，JETRO・高校・大学でのプレゼンテーションにより，問題点や改善点等が見つかり，徐々に精度の高いプレゼンテーションができるようになり，発信する側としてのスキルの向上が認められた。本人たちもその点に関しては自覚している。

但し，内容に関してのＱ＆Ａに於いては，特にリスニング能力に不足が見られたので，模擬練習等でもっと練習する必要があったのではないかと感じる。こちら側が準備したことは発信できるが，予期せぬ内容に於けるその場での即興的なやりとりが上手にできない場面が多々見られた。より時事的・社会的・学術的な話題について，その場で対応できる英語でのコミュニケーション能力を向上させる事が肝要であると感じる。

（5）イギリス

【ア　概要】

日　時	平成３１年３月２２日（金）～３月２９日（金）７泊８日間
訪問先	ロンドン近郊（グレートブリテン及び北アイルランド連合王国）
参加者	２学年生徒１２名　男子１名，女子１１ 引率者　教諭　尾竹　陽子（英語科）・久貝　啓介
目　的	１　現地の学生との交流を通じて国際的視野を広げるとともに，英語によるコミュニケーション能力を高める。 ２　異文化への理解を深めるとともに，自国の文化を再認識する。 ３　現地の高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに，ディスカッションを行い，考えを深め，異なる視点を得たりすることにより，課題研究を深化させる。

【イ　日程】

月日	スケジュール等	宿泊
平成３１年 ３月２２日（金）	・成田発 ・ロンドン着	ホームステイ
３月２３日（土）	・オックスフォード大学でのプレゼンテーション・ディス	ホームステイ

	カッション	
３月２４日（日）	・ホストファミリーとの交流（コッツウォルズ）	ホームステイ
３月２５日（月）	・ジャパンハウス，クレアロンドン事務所訪問	ホームステイ
３月２６日（火）	・ホリポートカレッジ（バークシャー）でのプレゼンテーション・ディスカッション等	ホームステイ
３月２７日（水）	・ロンドン現地調査	ホームステイ
３月２８日（木）	・ロンドン発	機内
３月２９日（金）	・成田着	

【ウ　事前指導】

回	日時	学習内容
１	１１月　９日（金）	今後の事前研修，英語研修について
２	１２月　７日（金）	課題研究発表準備
３	１２月１３日（木）	保護者説明会
４	１２月２１日（金）	課題研究発表（日本語）
５	１月１０日（木）	課題研究プレゼン準備
６	１月１１日（金）	イギリス地誌（関先生）
７	１月１８日（金）	プレゼンスライド＋原稿　提出
８	１月２４日（木）	プレゼン（英語）Ｑ＆Ａ　ディスカッション
９	１月２５日（金）	プレゼン（英語）準備
１０	１月３１日（木）	プレゼン（英語）Ｑ＆Ａ　ディスカッション
１１	２月　１日（金）	プレゼン（英語）準備
１２	２月　７日（木）	プレゼン（英語）Ｑ＆Ａ　ディスカッション
１３	２月２１日（木）	プレゼン(英語)準備
１４	２月２２日（金）	プレゼン（英語）Ｑ＆Ａ　ディスカッション
１５	３月１３日（水）	プレゼン（英語）Ｑ＆Ａ　ディスカッション
１６	３月１４日（木）	プレゼン（英語）Ｑ＆Ａ　ディスカッション

【エ　平成２９年度実施報告（平成３０年３月２２日～２９日）】

（ア）オックスフォード

スピーチの基本技術について，オックスフォード大学生の指導を受けた。アイコンタクトや，身振り手振りの効果的な使い方（机を叩く，足を踏み鳴らす）など，具体的な手法について指導を受けた。翌日，学生を前に生徒が課題研究をプレゼンテーションし，質問や評価をしてもらった。手持ちの原稿から目を離せないことや，質疑応答になるとほとんど満足な回答ができないことなどが課題として指摘された。

（イ）ケンブリッジ

ケンブリッジ大学生を前にして，課題研究をプレゼンテーションし指導を受けた。発表については概ね好評であったが，学生の話す英語のアクセントが強く，かつ早口であったためか質問がほとんど聞き取れず，質疑応答はなかなか成立しなかった。想定される質問をいくつも用意してそれに答えられるようにしておかないと，臨機応変

に英語で応答することは困難であることを改めて実感させられた。

（ウ）ホリポートカレッジ

ホリポート高校は，公立高校ながら学生寮を完備し，ヨーロッパや香港などからも多くの留学生が在籍している国際色豊かな高校である。高校生２０名の前で課題研究のプレゼンテーションを行った。「日本語教育に関わる問題」「難民を受け入れるために」「『見た目』問題」「バリアフリー社会」「食品ロスを減らすために」「『語り部』運動について」「障害者に公平な社会」について，それぞれ生徒は原稿を手にすることなく，相手を見ながら，表情豊かに，身振りも交えて，プレゼンテーションを行った。高校生から様々な質問が出され，アクセントの強い高校生の英語に四苦八苦しながらも活発に意見交換を行った。一例として，戦争について，「戦争はいけないもの」という前提で発表を行った生徒に対し，現地の高校生の多くは「私たちは必要があれば国のために進んで戦う。」と答え，戦争に対する考え方の違いに驚かされる場面があった。生徒たちもこれまで当然と考えていたことに疑問が投げかけられ，戸惑いはしたものの，異なる視点からの意見を聞いたことで，研究テーマへの考察をさらに深めることができた。

（エ）ロンドン市内

ロンドン塔，セントポール寺院，ウエストミンスター寺院，バッキンガム宮殿を見学。大英博物館ではロゼッタストーンをはじめ，教科書でしか見たことがない数々の展示品を直に目にすることができた。生徒は，この博物館が入場料無料であり，国民の寄付によって運営されているということを知り，文化に対する懐の深さを感じた。また，生徒は，ロンドン市内の建物が古いものばかりであることに気づいた。聞けばイギリスでは家を新築するということはほとんどなく，古い家にリフォームを加えて住むのだという。ロンドンの街並みもビクトリア女王の時代にその原型ができたと聞き，１０年もすると町の風景が一変してしまう日本との違いに驚かされた。交通の面でも，ロンドンでは歩行者は少しでも車が途切れれば信号の色にはお構いなく道路を悠々と横断し，車は極めてゆっくり安全運転している様子を見て日本との違いを感じていた。

（オ）事後指導

a　レポート提出

帰国後，生徒は研修の成果をレポートにまとめた。

b　報告会

①　日　時　平成３０年５月８日（火）６限　ＧＬ探究（総合的な学習の時間）

② 対　象　　１・２学年生徒
③ 場　所　本校体育館
④ 内　容　現地校で行った課題研究の発表や訪問先での活動報告

c　アンケート

帰国後，参加生徒にアンケートを実施した。

1　この研修に参加して日本の歴史・伝統・文化をより深く理解する必要性を感じた。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
１０	3	2	0	１５
2　この研修に参加して外国の歴史・伝統・文化に対する興味・関心が高まった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
１０	5	0	0	１５
3　日本の歴史・伝統・文化を外国人に英語で説明することができる。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
2	7	6	0	１５
4　課題研究の内容についてイギリスの高校生や大学生と英語で話し合うことができた。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
3	9	3	0	１５
5　今回の海外研修で，課題研究に関する新たな（異なる）視点・情報を得る機会があった。				
おおいにあてはまる	だいたいあてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	計
１０	4	1	0	１５
6　５で「おおいにあてはまる」または「だいたいあてはまる」と答えた人は，具体的に（いつ，どこで，どのようなことを）書いてください。				
・実際に「語り部」を行う上で改善すべきところを教えてもらったことと，現地の高校生に戦争に対する根本の考え方の違いを教えてもらったこと。 ・イギリスでは日本にとても興味のある人が多く，日本人としてしっかり説明できるようにする必要があると感じた。 ・日本語を学ぶのに，教科書にこだわらなくてもよいのではという意見をもらった。 ・「日本の方が障害者に優しい」と言われて，日本にしかできないことがあるのではと感じた。				
7　自分の課題研究について，イギリスの高校生や大学生からどのような質問やコメントを受けましたか。また，それに対してどのように答えたり考えたりしましたか。				
・平和を保つための他の方法についても考えて，語り部活動と比較すると良い。 ・障害者は普通の人と同じような進学や就職をすることができないのか？ ・日本の法律を変えて，食品ロスを減らしてみてはどうか。イギリスで行われているコンポストの普及を試みてみてはどうか。身近なものを減らすよりも企業で減らした方がいいのではと言われたが，生産段階と消費段階の比を出し，日本のような先進国では消費段階での食品ロスの比が高いことを示して納得してもらった。 ・日本語を教科書を使って学ぶのでなく，映画を使って学んではどうかという意見を得た。交流の機会を持つという自分の意見には大学生も大いに賛同してくれた。 ・現にイギリスでは難民を装った人々によるテロが起きている中で，日本に来る難民が本当にそのような問題を起こさないと確証が持てるのかと質問された。確かにそのようなことが無いとは言えないが，それはごく一部の人で，ほとんどの難民は安全に生きたいだけだと回答した。				

８　７で答えたイギリスの高校生や大学生からのコメントに対して，どのように考えましたか。
・たとえほとんどの難民が善良だったとしても，たった一部の人々の行為だけで悪いイメージが定着する恐ろしさや，実際に亡くなった人がいる状況を重く感じた。もし日本でもテロがあったら，私はそれでも難民を受け入れようと言えるだろうか。 ・我々が思いもよらない，しかしポイントをついた質問をしてきたので，答えに戸惑ったりした。もっと対応ができるように知識をつけるべきだと感じた。
９　この海外研修で学んだこと，得たこと，感じたこと等，自由に書いてください。
・人前で話すときに「うまくやらなきゃ」といつも思い，緊張してしまっていたのですが，今回のイギリス研修の雰囲気は「失敗から学ぼう」という感じだったので，その雰囲気が体に染み付き，日本に戻ってからも緊張せず余裕を持って話せるようになりました。困っている外国人も進んで助けられるようになりました。また，本気で課題を解決したい，と思うことが大切だということを学びました。 ・今回の研修で，より積極的にコミュニケーションをとり，アイコンタクトを意識して話せるようになったと思います。また，食文化や街並みの違いなどを肌で感じることができてとてもいい経験になりました。

（カ）成果と課題

研修の目的１「現地大学生との交流を通じて国際的視野を広げるとともに，英語によるコミュニケーション能力・プレゼンテーション能力の伸長を図る。」については，オックスフォード，ケンブリッジ両大学の学生と交流することにより，十分に達成できた。特に，日本人の苦手とする「自分の意見をはっきりと述べる」ことについては，大学生から具体的な助言をいただき，かなりの進歩が見られた。また，イギリス英語の発音に戸惑ったこともあるが，相手の問いかけに対し臨機応変に反射的に言葉を返すだけの英語力にはまだまだ至らず，コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力にも自ずと限界ができてしまう現実も否定できないと感じた。

研修の目的２　「英国の文化・伝統に触れ，異文化への理解を深めるとともに，自国の文化を再認識する。」については，現地での寮生活，大学生や高校生との交流，ロンドン市内調査等を通じて，十分に達成できた。家や家具は古いほどよいというイギリス人の価値観は，使い捨てに慣れた生徒にとってたいへん新鮮に感じられていた。

研修の目的３「現地の高校生を対象に課題研究の成果を発表するとともに，質疑応答やディスカッションなどを通じて異なる視点からの考えを知り，研究を深化させる。」についても，目的は果たせたのではないかと感じている。生徒は原稿に頼らず，パワーポイントの画面を見ながら堂々と発表を行なった。しかし，社会や文化背景が異なる現地高校生から，まったく異なる観点からの意見や質問が出され，しばし戸惑う場面も見られたが，生徒たちは冷静に対応し，可能な限りの説明や反証を試みていた。自らの課題研究を見直し，さらに深めるためのよいきっかけとなった。